

あまんきみこの戦争児童文学

——戦争体験の表象とその問題——

木村 功

旧満州で生まれたあまんきみこには、戦争に関する児童文学作品も多い。旧満州を舞台にした作品では、植民地支配と被支配、戦争協力、棄民問題など、旧満州特有の問題を描き、戦争についても、死んだ幼児、残された遺族、そして「戦争を知らない子供たち」の観点から、戦争の無残、喪失感、戦争体験の継承といったテーマが描かれていた。ただし「雲」は、改稿過程の中で開拓農民の戦争協力という要素が省略され、先行バージョンに比べて、戦争観の点で問題が残る。

Keywords : 戦争児童文学、あまんきみこ、旧満州、戦争観、「雲」改稿

一、戦争を語ることと戦争児童文学

二〇〇九年五月九日、あまんきみこは二松学舎大学で行われた昭和文学会の研究会に招かれた。宮川健郎によるインタビュウが終わった後、会場との質疑応答が始まり、自作が教科書に採録されていることについて感想を質されたあまんは、「ちいちゃんのかげおくり」に関する以下のエピソードを紹介した。

授業でこの作品を習った子どもから、お腹がすいたのなら、ちいちゃんはどうして冷蔵庫から食べ物をとってこないのかな、自分なら冷蔵庫から食べ物をとってくるよ、というコメントを記した作文を受け取ったのだそうである。

「ちいちゃんのかげおくり」の読者は、この児童がコメントしている箇所が、空襲の最中に母と兄にはぐれたちいちゃんが一人、家の焼け跡で待っている場面であることを想起できるだろう。第二次世界大戦当時、まだ冷蔵庫が無かったという誤認が問題なのではない。この児童にとって、空襲で母親と離別したこと、家を焼かれてしまうということが必然的に食べ物の入手を困難にすることは、理解も想像も及ばない事態なのであろう。見方をかえればそれは、指導する側の教員にとって、自分も体験したことのない戦争の説明を要求され続ける授業の限界が露呈したエピソードなのかもしれない。

かつて中村哲也は、「戦争体験者の減少による「戦争体験・戦争の記憶」の「風化」を問題視するだけでなく、戦争体験の「伝承」の風化を切実に問う必要があると思う。」と述べたが、右のエピソードは、はからずも「戦争体験の

「伝承」の風化」の終着点を物語るものとなっている。

このような状況に立ち至るまでに、警鐘のメッセージはさまざまに発せられていた。児童文学に限る限りでも、例えば宮川健郎は「もしかしたら、今日の戦争児童文学は、戦争を描きながら、実は、楽観的な見とおしのほうにかけつけているのではないか。作家たちは、戦争児童文学を書きつづけるということ、私たちは、戦争児童文学を読みつづけることで、安心しきっているのではないのか。」と警告していた。どうやら我々は、宮川の言葉に続けて、小学校教員や、中等学校の国語科教員は、教室で戦争児童文学や戦争文学を教えることで、あたかも戦争体験を継承している錯覚に陥っていた可能性についても、追記しなければならぬようだ。

かつて戦後五十年の節目に当たる年に、埼玉県の小中学生が書いた戦争と平和を考える作文数百点の選考に当たった経験を持つ藤田のぼるにも、以下のようコメントがある。

岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系、国語教育講座 七〇〇—八五三〇
岡山市北区津島中二—一—

A Study on AMAN Kimiko and Representation of War in Children's Literature

Takumi KIMURA

Department of Japanese Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama City 700-8530

相当にハードな仕事でもあったのだが、なんといつても圧倒的な感想は、「なんと皆似たような論調なのだろう」という思いだった。(中略) まずは物語や映画などで見た戦争の悲惨さ、祖父母から聞いた戦時中の生活の大変さ、それに比べて今は平和であり、わたしたちは恵まれてもいる。だからこそ、この平和を大切にしなければならぬ。ここまでは、まあ予想できた。僕がやや意外に思ったのは、日本の「加害」という問題に言及しているものが少なくない、ということだった。日本は戦争中にアジアの人たちに対してひどいことをし、迷惑をかけた。だから、二度とそのようなことにならないよう、わたしたちはアジアの国々と仲良くしなければならぬ。その通りとしか言いがたないが、なにか言葉が上滑りしているように思えてならなかったのだが、(後略)^注(傍線部引用者。以下同)

ここには、戦争を学び、日本の「加害責任」にまで言及しながら、それが作文という形で表出された場合、それが個々の意見の表明という形を一応とりつつも、「教わった」ことの鵝返しでしかない、表層の見解に留まっていることへの違和感が出されている。児童・生徒にとって、戦争は学校の授業で学ぶ歴史の一つ、知識なのであり、彼らの祖父母のように人生の中で生きた体験なのではない。現代日本の日常生活の中に、自分の存在を賭して切り結ぶ厳しい「有事」が存在するわけではなく、概ね平穏な世界で生きている児童・生徒が、知識としての戦争を自分のこととして受容し、世界像を再構成していくことは困難であろう。ここに、戦争体験はもちろん、戦争体験を「伝承」することが風化していく原因がある。

本論で研究対象とするあまんきみこは、戦時中を満州で過ごしながら、後述するように、そのことの意味を内面化するまでに時間を要したと述べる児童文学の書き手である。常々童話を書く主婦というスタンスを言明するあまんが、看過していた戦争をどのように再発見し、改めて自分の世界の一部としていつたのかを検証することは、翻って児童・生徒が知識としての戦争と自分の世界を関連化させる有効な示唆を与えてくれるのではないか。

二、あまんきみこの「戦争」

あまんきみこ(本名は阿萬紀美子)は、一九三一年八月一三日に旧満州(現

中国東北部)撫順市に生まれた。当時父親は南満州鉄道株式会社に勤務しており、その父の転勤に伴い、新京を経て大連市で育った。一九四五年神明女学校二年の時に日本の敗戦を迎え、一九四七年三月には日本へ引き揚げた^{注4}。

古田足日は、(彼女は安房直子、立原えりかとともに現代日本の「童話」を代表する。彼女たち三人は、ぼくの見方では小川未明の正統な後継者である。(中略) / ここで、ぼくはあまんきみこ独自のものとして、あの戦争との関係という項目を立ててみたい。他の二人にくらべて、彼女はあの戦争にふれることが多いのである。)と、あまんと(あの戦争)に関する注目すべき指摘をしている。では古田のいう(あの戦争)を、あまんなは自身の体験を踏まえ、どのように考えているのであろうか。

私は一九三一年は満州事変が起こった年に生まれて、子ども時代は戦争時代でした。ですから、自分の子ども時代を思い出せば戦争から離れられない。

それから、私が生まれ育った旧満州というのは、日本が中国に作った傀儡の国家だったわけですから、街の日向の部分に日本人が暮らしていたわけですね。そして、中国の人たちをみな日陰の部分に押しやっていました。

で、戦争というものさういいう自分自身の存在そのものの罪悪感が、私の作品の根元にあると思います。^{注5}

自身の出生を満州事変と結びつけて述べていることから明らかに、あまんとって戦争は大きな意味を有している。特にそれは、旧満州で生まれ育ったことで、日本人が日向に暮らし、中国人を日陰に追いやっていたという反省を踏まえ、(自分自身の存在そのものの罪悪感)を醸成したとする。少々分かりにくいこの(罪悪感)については、次の引用の傍線部のように説明されている。

あまん——私は、戦争時代と子ども時代が重なっています。それに満州で生まれ育ちましたから……。さきほどの話の続きのようになりますが、体内感覚で日向のあたたかい場所にもどると、そこはそこにいるべき人たちを日陰に追いやっていた場所だということ、つまり自分の存在そのもので人の場所を侵していたということから、どうしても目をそらすことはできません。

子どものとき戦争が続き、敗戦になってその地が異国だということを初めて知りました。

〈自分の存在そのもので人の場所を侵していた〉ことに〈罪悪感〉を抱き続けている現在のあまんと比べて、少々意外なことであるが、少女時代のあまんは〈敗戦になってその地が異国だということを知る〉ように、〈私は病気をよくした〉ということもあってか、周囲の現実的世界に関心を持つよりも空想の世界で遊ぶことを好む少女であった。彼女の回想によれば、中国人の居住区に遊びに行くわけでもなく、学校でも学年下に日本人とは姓が異なる生徒が一人二人いたことは記憶しているそうだが、中国人との交流が日常生活の中に組み込まれていたわけではなかったようなのである。

しかし敗戦は、空想好きの少女にも世界観の百八十度の転回をもたらすことになる。あまんの通う女学校は、あまん自身の言葉によると標語を掲示するのが好きな学校だったのでそうだが、戦時中の「撃ちてしまん」「聖戦必勝」などというものが、敗戦後は「百八十度の転換」ただ一つに変わったということである。教員たちにも無事に帰国したい事情があり、そのように振る舞わなければならなかったことに思いが至ったのは後年のことで、当時は態度を翻した教員たちを嘘つきだと思ったと、あまんは回想する。

学校に通うようになって、教育は百八十度の転回、まっさかさまのことをおしえられ、非常に懐疑的になりました。二年ほどして引き揚げ船で帰ってきました。ですから戦争について深く考えるようになったのは、そのあとからです。過ぎてはじめて見えてきた部分がありました。東京に住んでいるころ、よく国会図書館に通って満州のことを調べました。悲惨な記録は弱い者ばかり——子ども、女性、老人、病人——。はじめにこちらが侵していたのですから……、どうにもつらくて……。

このようにあまんは、満州での敗戦を契機に、自らが身を置いていた満州や戦争について考える様になり、戦争の記録を読むことで次第に〈あの戦争〉への理解を深めていった。あまんが敗戦を契機に満州を「教材」として、自身の世界を再構成していったことが分かる。

このことと関連して、しばしばあまんによって言及される、敗戦後の国語の

授業で学んだウィリアム・ブレイクの詩「無知の告知」との邂逅についても触れておかねばなるまい。

一粒の砂に 世界を見
一輪の野の花に 天国を見る
掌のうちに 無限をつかみ
一瞬に 永遠を知る

敗戦によって授業で使える教材がなくなり、教員たちが授業に苦勞していた中で、国語教師の杉田政子が板書したこの詩を、中学二年生のあまんが目にしたのである。〈この時、私は初めて言葉そのもので感動したんですね。〉(中略)あまりに感動したので、私はずうっとその四行の詩を私自身が生きてくる中で、かき抱いていました」と折に触れて述べるほど、あまんは強い啓示を受けた。

あの四行詩は、ひよっとしたらファンタジーの一番根本(ねもと)を言っているんじゃないだろうかというふうには。さっきの話にもどりますが、本当というのは真実と事実がありますね。一粒の砂は事実ですね、世界を見るところのは、真実だと思っんです。で、一輪の野の花は事実です。でも、天国を見るというのは、真実じゃないか……と。

そうすると、真実の世界を見ることがよって事実を一つ一つ知ることでもできる。その事実によつて、世界という真実をつかまえることもできる。

この行ったり来たりするところにファンタジーがうまれるのではないか。(後略)

「事実」と「真実」のあいだ、「真実」と「事実」のあいだには、限らない想像の世界があり、だからこそ、そこにさまざまな創造の世界がある」と考えるあまんは、事実と真実を接続する方法としてファンタジーを見出す。想像／創造することが人間の特性の一つと考えるなら、あまんは想像／創造することこそ、世界を無限かつ多様に解釈しうる有効な方法であることを認識したのでといえよう。この「無知の告知」の詩篇を知ることによつて、少女あまんの空想癖は、物語を創作して世界の真実に迫る想像力へと置換されたのである。

以上のことに加えて、昭和文学会のインタビューで、あまんが子供の頃の作

文について言及した内容も紹介しておきたい。同居していた父方の叔母の指導の下、あまんは大人びた作文を書いていたのだが、小学校六年生の時に叔母が結婚して家を出ると、指導がなくなったことから大人の言葉に子どもの空想が混じった作文を書くようになってしまった。しかし女学校の国語教師が、あまんの空想を認める指導をしてくれたことで、あまんは「私の『言葉』を拾い上げてくれた」と述懐しているように、自分の空想世界を保持・発展させることができたという。この国語教師が、「無知の告知」を指導した杉田政子であった。「阿萬紀美子」は、旧満州の地で、国語教師の指導下に自分の「言葉」（空想）を発見し、敗戦による世界の転換を経て、想像／創造へと導かれた。やがて〈罪悪感〉を中心に、自分と世界の関係を自ら再構成するようになっていった。「あまんきみこ」による戦争児童文学作品群は、述べてきたような旧満州での教師との出会いと敗戦の体験を媒材として、姿を現すことになったのである。

三 あまん作品の分析と考察

ここでは管見に入ったあまんの戦争児童文学作品群を時系列に即して取り上げ、その戦争の表象を分析し、作品世界の特徴と戦争観について考察する。

あまんの戦争作品は、初期作品に多く認められ、一九六七年の「くましんし」をあまんのデビュー作と理解している読者には、意外の感を与えるかもしれない。そもそもデビュー作といわれる「くましんし」よりも前に、あまんが最初に発表したのは「ぼくらのたから」（『日本児童文学』第一巻第八号、一九六五年八月一日）という、戦争（空襲）を取り上げた作品であった。

太一と正雄は、草むらで綺麗な石（ガラス玉）を見つけて、宝物として地面に隠す。その後、その「石」を探しているおじいさんと知り合い、おじいさんの持ち物であることを知った。ガラス玉は空襲で妻と息子を亡くしたおじいさんが、家の焼け跡で拾ったものだった。大切な品を返そうとする子どもたちにも、おじいさんは、へきみ達がつととき、玉は未来にむかってひかるでしょう。きみ達のあす、あさって、いやそのさきにつながる未来が、あの中にはあるはずです。どうか、それを見つけてもらいたい。未来をたいせつにしてください」というメッセージを残して去る。

明らかのように「ぼくらのたから」は、ガラス玉を介して戦争体験を当事者から次世代の子どもたちへと継承することをテーマに描かれているといえよう。

次に、「白鳥」（『どうわ教室』四号、一九六七年）である。「白鳥」は、旧満州を舞台に、開拓村の日本人の少女ユキと満州族系中国人の少女アイレンの交流を描いている。ユキの開拓村が便衣隊の襲撃を受けた翌日、満州族の集落が日本軍の便衣隊掃討作戦の対象になる。それに巻き込まれたアイレンとともに、助けようとしたユキも炎の中に姿を消すが、次の瞬間轟音がとどろき、火柱が高くそそりたつ。そして〈何十という白鳥が、四方にむかってまいでたのである〉。白鳥たちは、先頭の二羽の白鳥にしたがって、まっすぐ天に向かってのぼっていった。

あまんは「白鳥」で、満州の開拓村における日本人と〈満人〉の支配／被支配関係を背景に描き込むことで、便衣隊が活動する理由を示している。その一方、そこで育まれた日本人と〈満人〉の二人の少女たちの友情と命を、日本軍が暴力的に損なう様子を叙述するのである。短編であるが、日本人―日本軍／〈満人〉―便衣隊、大人／子供の対比が、明確に記述されている作品である。しかし最後の死の場面を、ユキやアイレン、〈満人部落〉の人々が白鳥に変じるといふメルヘンの手法で描いたことで、日本軍が便衣隊もろともに、老人や子供を含む民間人まで虐殺してしまう事態の深刻さが、十分に伝わらなくなった点が惜しまれる。

「すずかけ通り三丁目」（『びわの実学校』第二六号（一九六七年二月））は、あまんの代表作である『車のいろは空のいろ』（一九六八年三月、ポプラ社）におさめられている。

タクシー運転手松井さんが乗せた中年婦人は、松井さんが聞いたことのないすずかけ通り三丁目へ行くようにいう。指示されたとおりに車を走らせるとその通りは実在し、車を降りた婦人が入って行った家からは、子どもたちの笑い声が聞こえてきた。その後家から出てきた婦人は駅に向かう車内で、昭和二〇年七月の大空襲で、当時三歳だった双子の息子たちを亡くしたことを松井さんに告げる。「もし、お子さんが生きていたら、もう、二十五歳ですわね。」という松井さんに、「いいえ、運転手さん。むすこたちは何年たっても三歳なのです。母親のわたしだけが、年をとっていきます。」と婦人は応える。駅に着いたとき、婦人は小さな老婆に変わっていた。

「すずかけ通り三丁目」では、戦後二二年の時間を経ても、当事者には決して癒されることのない深甚な喪失感が大空襲（戦争）によって刻みつけられていることが描かれている。

「ただ一機」（『どうわ教室』六号、一九六八年）は、一一歳のヒロシがパイロットの父親の操縦するセスナに乗って空を遊覧した時、ゼロ戦の大群に囲まれ、不思議な世界に舞い降りる話である。ヒロシはそこで、父の特攻隊時代の戦友だった久島や、広島島の原爆で死んだ人物と知り合う。更に自分と同じ年ごろの黒い毛の色をしたあさ黒い子供とも出会う。作品発表当時の日本は、同盟国アメリカのベトナム戦争に協力する状況下であり、この子供は戦場で死亡したベトナムの民間人を表現しているようだ。

「つらかったらう？きみ」

ぼくは、じぶんのまぶたがひくひくするのを感じた。じんと体じゆうがあつくなつた。わからないけど、わかる、わかるけどわからない、そんなものが、波みたいになって、ゆれ、ゆれ、ゆれ、ゆれ、ふくれあがり、もう、それは、胸のなかで、高潮みたいにせりあがってきたんだ。

ヒロシは不思議な国で、戦争で死んでいった「過去」と「現在」の人間達と遭遇し、それぞれの無念を知るのだが、死者たちの思いの程を受け止めきれない自分に苛立っている。声高に反戦を訴えずに、死者やそれを悼む者の思いに寄り添おうするあまん作品の特長は、ここにも認められる。

「雲」（『日本児童文学』第一四巻第九号、一九六八年九月一日）は、のち関英雄他編『現代日本の童話 ぼくらの夏』第一巻（小峰書店、一九七〇年五月）に収録された。現在は、中学校の国語教科書『現代の国語1』（三省堂）に改稿の上採録（二〇〇二年）されている。「雲」は、「白鳥」を書き改めたものであるが、その改稿の内容と問題点については、章を改めて論じたい。

なお、「日本児童文学」一九六七年七月号は「特集Ⅱベトナム・沖縄問題と日本の児童文学者」という特集が組まれている。「雲」の掲載号である同年九月号にも、「ベトナム・沖縄問題創作募集人選決定」として、ベトナムと沖縄を題材にした童話と詩が四編掲載されている。あまんの「雲」（初出）は、ベトナム戦争とそれを後方支援する日本（沖縄）の在り方を問題視した「日本児童文学」編集部の意向、さらには当時の日本社会の反戦意識と、通底した作品だったのである。

「美しい絵」（『びわの実学校』第三四号、一九六九年四月）は、孤児院で生活している少年が知り合った絵描きの青年を通じて、ソ連軍の侵攻によって始

まった避難行で自決に追い込まれた満蒙開拓団の悲劇を、体験者の話という形で物語っている。

当時一〇歳だった青年は、母親とともに新京へ避難する途上、体力を使い果たした母親と離別する。その後避難民の一行は、地元住民に襲撃され死者まで出してしまふ。ソ連軍と地元住民に追い詰められた一行は、次々に自決していったのであった。青年はその生き残りであり、帰国してから開拓団が集団自決するに至った真相を知る。

日本に帰って知ったのだが、満州にいた日本人は、だいたい一九五万人、そのうち、開拓民が二七万人だ。敗戦の前後に死んだ者が、十七万六千人、うち開拓民は、八万人なんだ。死んだ者の半数は、全体の一割あまりしかない開拓民だという。

ソ連が攻めてくれば、押さえていた満人が暴動をおこす——。関東軍（日本の軍部）は、そう計算はしていた。だが、開拓村は、満州のいたるところにある。その人たちを安全な場所にうつせば、日本は力がなくなったとみて、満人が、先に暴動をおこす。

それを、軍は、おそれたのだ。だから開拓村の農民たちは、はじめからすてられた。すて石になった。

国のため、というので、土をたがやしにでかけた農民たちは、国のために戦場にすてられたのだよ。

あまんが（よく国会図書館に通って満州のことを調べました。）と述べた、〈悲惨な記録〉とそのことへの評価が、引用文に見るように「美しい絵」には直截に書き記されている。ただこの時期のあまんには、〈地平線の見える広い土地を、満州の人たちといっしょにたがやして〉や、〈国のため、というので、土をたがやしにでかけた農民たちは、国のために戦場にすてられたのだよ〉というように、開拓農民の立場に寄った記述が認められ、侵略の協力者としての〈農民〉という側面は、視野の外にあった。

「どんぐりふたつ」（一九七一年三月、偕成社。のち加筆訂正の上「こんにちのはのこちゃん」一九八五年七月、偕成社）は、主人公のふたつが、壁に出来た不思議な「ふすま」を通して、ちゃこちゃん（実は母親の幼い頃の姿）と知り合い、自分の家族にまつわる「戦争」の歴史、すなわち母親が五人の家族を

失い、一人ぼっちになった経緯を理解していく。のぶこは父親から、「(前略) おかあさんが七つのとき、日本はせんそうをしていた。だから、てきのひこくきが、おかあさんのすんでいた町にも、ばくだんやしょういだんを、たくさんおとしたんだ。そのとき、おかあさんは、おかあさんと、おじいさんと、おばあさんを、いっぺんになくした。おとうさんもおにいさんも、せんちでなくなつたから、ひとりぼっちになったんだ。六にんかぞくが、せんそうで五にんもしんだんだよ」(「どんぐりふたつ」と教えられることで、戦争を「発見」する。

折しも前年の一九七〇年には、「戦争を知らない子供たち」という曲がジローズというグループによって発表され、全国的にヒットしていた。「戦争を知らない子供たち」である戦後世代が成人し、戦争を知らないことを標榜するよるな社会の中で、あまんは「戦争を知らない子供」を主人公に据え、改めて読者に「戦争」の再発見と、戦争体験の継承というテーマを提出したのである。

時期を同じくする『とらうきぶつ』(一九七一年八月二〇日、講談社)も、同じ構想の下に成立している。主人公こうたが、遊びに行った父方の祖母の家で、おもちの「とらうき」を見つめる。こうたは空飛ぶトラック「とらうき」の運転手チョココレとの交流の中で、父親が、友達を失った戦争を忘れてしまっていることを知った。(まさしくんは、おとうさんのなかよしだったんだ。そうか……。チョココレは、だからないんだ。しんだまさしくんと、わすれたおとうさんの心のために、ないんだ。でも、ほく、もう、わかつたんだもの。だから、あの国にいつて、はやくチョココレをなおしてやるんだ——)と思うようになる。

あまんが四年後に発表した「赤い風」(「びわの実学校」第七〇号、一九七五年)は、戦争の被害者として表象される民衆像から、一線を画した作品になっている。

五歳で満州から引き揚げてきた主人公のカナコは、小四の時に父がシベリアで抑留中に死亡していたことを知る。そして中学生になったカナコは、ある日祖父と亡き父の話をした時に、以下のように語る。「おとうちゃんがなんにもしないなんていえないよ、おじいちゃん。おとうちゃんの手はみえない血でぬれていたんじや。そこにいたというだけで。うちもじや。このカナコの手もじや」。

ここには、死んだ父ばかりではなく、自分も戦争に関与していたという強い自覚が語られている。そこにいたというだけで、「みえない血でぬれていた」と語るカナコの言葉に、「自分の存在そのもので人の場所を侵していた」と述

べるあまん自身の罪悪感が重なっていることは、改めて指摘するまでもない。前述した「戦争を知らない子供たち」とは異なる、侵略戦争の共犯者であることを自覚した子ども像が提出されたのである。それはまた、「美しい絵」で認められた開拓農民寄りの認識レベルから、一歩進んだ認識が示されたといえるだろう。

その一方であまんには、「おはじきの木」(『おかあさんの目』一九七五年一月、あかね書房)のような作品がある。

一年前に南方から復員したげんさんは、ある日新聞で娘のなかがおはじきをしながら、空襲で死んだお母さんと弟を待って、木の下で死んでいったことを知る。その場所を尋ねあてたげんさんが木の傍らで感慨にふけっていると、女の子がやってきてげんさんはかなこの話をする。夜になつてもその場に留まっていたげんさんは、昼間の女の子がかけてきて、木の中に入り込み、かなことおはじきで遊ぶのを見る。げんさんが声をかけると幻影は消え、げんさんはつめたい後悔の涙をながす。女の子の家では、夢から覚めた女の子が、木の中で女の子とおはじきをして遊んだ夢を見たことを母親に告げていた。

空襲を生き延びたにもかかわらず、誰からも構われずに空腹で亡くなった女兒に、戦争が生み出した人間の心の闇が重なっていく。メルヘンを介して、戦争の悲惨と戦争が人間から喪わせるものを、改めて読者に再認識させる。

エッセイ風の童話である「ねこん正月騒動記」(『日本児童文学』第二三巻第一号、一九七七年一月一日、のち「こがねの舟」一九八〇年十二月、ポプラ社)の中にも、旧満州に関するエピソードが登場する。主婦の「私」が、ねこの集會に紛れ込み、ねこの三毛氏にふるさとを尋ねられる。満州で生まれたことを答えると、「あちらでは、ひどいことをしたそうですね。われわれの教科書にも、きちんと記録されています」と言われてしまう。他のねこたちも不快感を示すので、「私」は思わず恐縮してしまふ。

もちろんこのエピソードは、「ねこ」の教科書にも「きちんと記録されているくらい、旧満州での行いは「ひどいこと」であったにもかかわらず、三毛氏と「私」の対話から浮かび上がってくるのは、「きちんと記録して」ない日本の社会科教科書への皮肉であり、罪悪感の欠如が諷されているようだ。

『ちいちゃんのかげおくり』(一九八二年八月、あかね書房)は、一九八六年以降現在に至るまで、光村図書国語科教科書(小三)に採択されており、あまんきこの代表作の一つとして認知されている作品である。

「ちいちゃんとその両親と兄は、父親の出征する前日に「かげおくり」の遊びをする。父の出征後、夏のはじめのある夜、ちいちゃんの住む町は空襲に見舞われ、ちいちゃんは母親と兄に別れてしまう。焼け落ちた家に一人戻って来たちいちゃんを案じる大人たちも、自分たちの生活で精一杯で構ってやれない。やがて衰弱したちいちゃんは、「かげおくり」をしながら亡くなってしまふ。戦争が終わった何十年も後、ちいちゃんが死んだ場所は小さな公園になり、小さな子どもたちが遊んでいる。

戦後三十七年が経過して発表されたこの作品は、「戦争を知らない子供たち」の話ではなく、戦時中を生き延びた幼児ちいちゃんの視点を通して、出征・銃後の生活・空襲といった戦時下の厳しい生活を描き出している。そしてちいちゃんという幼児から、父母と兄という家族、生活や遊び、命、その未来など、戦争が奪い去ったものを読者に読みとらせることで、戦争に対する静かな怒りを表現しているのである。

一方「しらないどうし」(子どもと読書)一五五号、一九八四年七月一〇日のち『続 車のいろは空のいろ』一九八六年八月、ポプラ社文庫)は、「三十三年前のきょう」、町がB29の空襲で焼かれたことを、客の一人の老婦人から松井さんは聞く。そして松井さんはその夜、若い女性と三歳くらいの子供を連れて白髪頭の紳士を乗せる。紳士は、自宅へ向かう途中で眠りこんでしまったが、二人の案内で松井さんは紳士を自宅まで送り届けることが出来た。先に降りる二人。松井さんに起こされて、同乗者の話を聞いた紳士は、あわてて自宅へ飛び込む。戻ってきた紳士は、自分が出征中に、妻と息子が空襲で亡くなっていたことを告げ、仏前にお参りするよう松井さんに頼むのであった。

「すずかけ通り三丁目」と同じモチーフが、「しらないどうし」でも繰り返して表現されていることは見やすいであろう。三三年という時間を経て、白髪頭になった紳士にも、空襲による深い喪失は刻みつけられたままなのである。ただ、「すずかけ通り三丁目」では、母親が亡き息子たちと再会できていたのが、本作では家族が「しらないどうし」になってしまっている点に、当人たちでさえ免れない時間の無情な浸食作用が表されている。

以上、管見に入った限りで二三の、あまんの戦争児童文学作品を対象に分析・考察してきた。あまん作品の「戦争」観と、内容上、表現上の特徴をまとめると、以下の四点に整理できる。

一、「満州」もの(「白鳥」・「雲」・「美しい絵」・「赤い風」・「ねこん正月騒動記」)

旧満州で生活したあまんの、「罪悪感」をベースに構築された作品群。戦時下の植民地支配、民衆レベルの共犯関係の確認、棄民された開拓団の問題、侵略への不徹底な反省ぶりを批判している。表現上は、メルヘンを用いることは少なく、リアリズムの手法が採られている。「白鳥」「雲」は、当時のベトナム戦争(一九六〇―一九七五)の時代状況と関連している。

二、「かずこ・ちいちゃん」もの(「おはじきの木」・「ちいちゃんのかげおくり」)

中心人物である女兒には、遊び(おはじき、かげおくり)、父の出征、母と兄(弟)を待ちながら亡くなる、といった共通点がある。無力でいたいけな子ども像が提出されており、弱者までも容赦なく死にいたらしめる「戦争」像を浮かび上がらせる。女兒たちの死後の姿を表すのに、メルヘンが用いられた。

三、「松井さん」もの(「すずかけ通り三丁目」・「しらないどうし」)

主人公の松井さんを通して、戦争を生き延びた遺族が、喪った家族を哀惜する話(死んだ家族が生きている家族を思いやるパターン)は、表裏の関係)。メルヘンを用いて、戦争が遺族に刻みつけた癒されることのない喪失感を描く。

四、「戦争を知らない子供たち」もの(「ぼくらのたから」・「ただ一機」・「とらうきぶつぷ」・「どんぐりふたつ」)

親が子どもに直接戦争体験を語るのではなく、メルヘン世界を媒介することで、「戦争を知らない子供」が戦争を発見(読者は再発見)し、それを受け入れ、戦争体験を継承する。戦争に対する今後の態度を、子どもたちの姿に表しているのである。

戦争について、死んだ幼児、残された遺族、そして「戦争を知らない子供たち」と、それぞれの観点から、戦争の無残、喪失感、戦争体験の継承といったテーマが描かれていた。あまんは、個々に刻み込まれた、根源的で解消できない悲劇的体験として戦争を表象していることがわかる。以上述べたことで、やはり注目すべきは旧満州を取り上げた作品が多いという点である。それはあまんが旧満州出身者であるというだけでなく、植民地支配と被支配、戦争協力、棄民問題など、旧満州特有の問題が存在しているからに他ならない。

またその世界像を表現するためにメルヘンが多用されているが、これは戦争をめぐる様々な事実を、想像世界を媒介することで真実へと変換していく、あ

まん作品の基本的な手法であることを確認しておきたい。戦争を一つの歴史上の知識や物語として消費するのではなく、想像力を介して自分の世界の一部として関連付けること、それを創作活動の中で繰り返し、自分の中に真実を積み上げていく生き方の中で、はじめて戦争体験の風化が妨げられることを、あまきみこの戦争児童文学は、教えてくれるようである。

四 「雲」の改稿と、その問題

最後に、「雲」（「日本児童文学」第一四巻第九号、一九六八年九月）の改稿とその問題点について述べておきたい。初出の「日本児童文学」版「雲」、現代日本の童話」版「雲」、教科書版「雲」の主な異同は、別に掲げる「異同表」の通りである。

まず異同1にある、冒頭の加筆に注目したい。初出と『現代日本の童話』版を比較すると、「満州国」で「開拓」することへの意味づけが加筆されたのが大きな変更であることが分かる。教科書版では更に、『現代日本の童話』版に批判的な視点が加筆されている。例えば、〈満州国というあたらしい国』という『現代日本の童話』版の表現は、教科書版で〈満州国』という国』に改められ、「あたらしい」という形容詞が読者に与える肯定的なイメージを消去した。（そんなことば）とあるのを教科書版では新たに「そんなきれいなことば」というように、批判を込めた書きぶりに改めた箇所もそうである。次に「異同表」を見て分かることとして、匪賊についても、反日的抵抗運動であることが明らかになるよう順次修正されている。このような点に、あまんの満州国に対する歴史的な認識の深まりを認めることができるだろう。

ところがこの「教科書」版では、匪賊に関する説明の修正と反比例するように、植民地における日本人と「満人」の支配／被支配の関係がことごとく消去されているのである。例えば、異同2に掲げる小学校校舎の建築場面である。初出・『現代日本の童話』版ともに、〈おおぜいの満人がはたらいていた〉ことを明記している。それが教科書版では、骨組みだけの日本人小学校の校舎を描写するだけであり、小学校校舎の建設に従事させられている〈満人〉の姿は

消去されている。それは異同6においても、〈たくさんの満人〉とあるのが、日本人か〈満人〉か分からない〈人影〉へと曖昧化されてしまっている。異同5でも、ユキの家に〈いつも朝早くくる満人の使用人たち〉（初出）とあるように、支配／被支配関係は明らかなのだが、教科書版では〈いつも来る中国の人たち〉と改められ、中国人たちがなぜ「いつも来る」のか、先行パージョンを読んでいないと、文意すら理解できない表現になっている。そもそも、〈満人〉という呼称に込められていた差別的ニュアンスも、〈中国人〉という呼称に改められたことで払拭されてしまっていることに留意が必要だ。

そしてこれらの変更は、「雲」という作品の根幹に関わる重要な問題を提起しているのである。初出・『現代日本の童話』版もともに、ストーリーの背景に、日本と中国の支配／被支配関係が、民間レベルにまで及んでおり、それが、昼は通常の生活を営む一方で、夜になると便衣隊へ変貌したり、それに協力したりする中国人側の行動に説得力を与えていた。ここで「赤い凧」のカナコの認識を援用するなら、ユキも両親も便衣隊に攻撃される理由があるのである。ユキとアイレンとの交流は、そのような大人たちの緊張関係とは別次元で育まれていた子ども同士の親和的な交流として描かれ、それが大人たちの世界の暴力に巻き込まれて喪われたために、「雲」の悲劇性はいや増すのである。

ところが教科書版で、日本人と〈満人〉との支配／被支配関係が消去されたことで、「雲」の悲劇は、日本軍と便衣隊の戦闘に、「善良な」日中の民間人が巻き込まれた悲劇に変質してしまうことになる。悪いのは戦争なのであり、ユキもアイレンも、開拓団や〈満人部落〉の人々も、いずれもその被害者なのである。そこには、侵略戦争を有形・無形に支えてきた民間人の、国家との共犯関係を剔抉したかつての視点が失われてしまっている。教科書版は、このような後退したメッセージを生徒に向けて発信しているといえよう。

以上述べた「雲」の作品世界の「変質」は、先に述べた戦争体験の風化とはまた別の問題である。あまきみこの「雲」をめぐる改変問題は、想像力を介して真実に迫ろうとする自覚的な児童文学の書き手にとってですら、初出から四〇年が経過する時間の中で、戦争に対する一つの認識を保ち続けることには厳しい困難が伴うことを、はからずも物語っている。

- 注1 中村哲也「物語られた『戦争』を読むこと——教材『ちいちゃんのかげおくり』——」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力』小学校編3年、二〇〇一年三月一六日、教育出版、五七頁)
- 2 宮川健郎『現代児童文学の語るもの』(一九九六年、日本放送出版協会、一七六頁)
- 3 藤田のぼる「日本人にとっての戦争または戦争児童文学にとっての子ども」(『日本児童文学』第五〇巻第五号、二〇〇四年一〇月一日)
- 4 「あまんきみこ年譜」(自筆年譜)(神宮輝夫『現代児童文学作家対談9』一九九二年一〇月、偕成社)
- 5 古田足日「あまんきみこ メモ」(『国語の授業』七十二号 一九八六年二月一五日)
- 6 あまんきみこ・小松善之助(対談)「わたしのファンタジーの世界」(『国語の授業』九四、一九八九年一〇月二五日)
- 7 神宮輝夫『現代児童文学作家対談9』(一九九二年一〇月、偕成社、三六、三七頁)
- 8 注7に同じ、四二頁。
- 9 あまんの回想によれば、一九八五年に旧満州を再訪した際、当時日本人たちから星ヶ浦と呼ばれていた海水浴場が、中国人には立入制限されていたことを同級生の説明で初めて知ったことである。
- 10 あまんきみこ、西郷竹彦「対談 あまんきみこの世界」『文芸教育』七九号、二〇〇〇年八月、三五頁。
- 11 注7に同じ、三七、三八頁。
- 12 注10に同じ、三五、三六頁。
- 13 注10に同じ、三六頁。
- 14 注10に同じ、一三頁。
- 15 リストアップには、宮川健郎「あまんきみこの『原型』」『文芸教育』七九号、二〇〇〇年八月、渡辺善雄「『ちいちゃんのかげおくり』の方法と基底——あまんきみこの戦争児童文学——」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力』小学校編3年、二〇〇一年三月一六日、教育出版)、畠山兆子「あまんきみこ初期作品研究——『車のいろは空のいろ』収録作品を中心に——」(『梅花児童文学』第一号、二〇〇三年六月三〇日)、畠山兆子「あまんきみこ戦争児童文学の変遷——『ぼくらのたから』から『おほじきの木』へ——」(『梅花児童文学』第一四号、二〇〇六年六月一七日)を参照した。

「雲」異同表

「日本児童文学」

「現代日本の童話 ぼくらの夏」

教科書

<p>「アイレン、見てごらん。カササギが、いっぱい。」 立ち上がったユキは、手についた砂をはらい落しながら、いった。 「ん？」 やっとできたばかりの砂のトンネルを、二つ三つおさえてから、チャン・アイレンも立ち上がった。 黒いあたまのカササギが、夕やけで朱色にそまった空を、群れをなしてとんでいく。 太陽は、もう、地平線にかくれ、こはく色のコウリヤン鳥には、しずかな夕ぐれがしのびよっていた。</p>	<p>「アイレン、見てごらん。カササギが、いっぱい。」 立ち上がったユキは、手についたすなをはらいおとしながら、いった。 「ん？」 やっとできたばかりのすなのトンネルを、二つ三つおさえてから、チャン・アイレンも立ち上がった。 黒い頭のカササギが、夕やけで朱色にそまった空を、群れをなしてとんでいく。 太陽は、もう、地平線にかくれ、こはく色のコウリヤンばたけには、しずかな夕ぐれがしのびよっていた。</p>	<p>「アイレン、見てごらん。カササギがいっぱい。」 立ち上がったユキは、手についた砂を払い落とすと言った。 やっとできたばかりの砂のトンネルを、二つ三つ押さえてから、チャン・アイレンも立ち上がった。 黒い頭のカササギが、夕焼けで朱色に染まった空を、群れをなして飛んでいく。 太陽は、もう地平線に隠れ、こはく色のコウリヤン鳥には、静かな夕暮れが忍び寄っていた。</p>
<p>ここは、村はずれの小さな丘の上——。 少女達のうしろには、まだ骨ぐみだけの日本人小学校の校舎が、長い影をひいてしずまっている。(一一)</p>	<p>いまの中国東北部に、日本が、満州国というあたらしい国をつくったばかりのころだった。 満州には、ひろびろとはてがないような、土地がある。この土地をたがやし、手いれをして、たくさんの作物をつくろう、ゆたかなみどりのはたけにしよう——。そんなことばをきいたり、よんだりした農家の人たちで、海をわたって、はたらきでかけるものもいた。 あれた土地を、おもいつきり、開拓しようというゆめを、もっている人ばかりだった。そうした人たちが、そのころ満州のあちこちに、日本人開拓村をつくって、あせをながしてはたらいっていた。 ここは、そんな開拓村のはずれにある、小さな丘の上なのだ。</p>	<p>中国東北部に、日本が「満州国」という国をつくったばかりのころだった。 この地には、広々と果てがないような土地がある。土地を耕し手入れをして、たくさんの作物をつくろう、豊かな緑の畑にしよう——。そんなきれいなことばを聞いたり読んだりした農家の人の中に、海を渡って働きに出かける者がいた。 荒れた土地を、思いつきり、開拓しようという夢をもっている人ばかりだった。その人たちが、中国東北部のあちこちに日本人開拓村をつくって、汗を流して働いていた。 ここは、そんな開拓村のはずれにある小さな丘の上なのだ。</p>
<p>少女達のうしろには、まだ骨ぐみだけの日本人小学校の校舎が、長い影をひいてしずまっている。さっきまで、おおぜいの満人がはたらいっていたのだ。(一一)</p>	<p>ユキとアイレンは、ならんで、地平線をながめていた。 ふたりのうしろには、まだ骨ぐみだけの日本人小学校の校舎が、長いかげをひいてしずまっている。(一一)</p>	<p>ユキとアイレンは、並んで、地平線を眺めていた。 二人の後ろには、まだ骨組みだけの日本人小学校の校舎が、長い影を引いて静まっている。(一一)</p>
<p>汽車など乗ったことのないアイレンは、この丘の北にある満人部落と、南にある日本人村しか見たことがないのだ。(一一)</p>	<p>汽車などのつたことのないアイレンは、この丘の北にある満人部落と、南にある日本人村しか見たことがないのだ。(一一)</p>	<p>汽車に乗ったことのないアイレンは、この丘の北にある中国人村と、南にある日本人村しか知らない。(一一)</p>
<p>よく、この時期に馬賊がでるといわれた。しかし、馬賊と一口にいっても、追いはぎなどの匪賊なのか、日本人が満州に出てくることに反対して運動をつづけている便</p>	<p>匪賊というのは、追いはぎのばあいもあるが、そのほとんどは、日本人が満州に来て、じぶんたちの土地を、ただのようにやすくとり上げ、勝手なことをするのは</p>	<p>匪賊というのは、そのほとんどは、日本人が自分たちの土地を安く取りあげ、勝手なことをするのに反対している便衣隊だった。便衣隊は、ふだんは普通のかっこう</p>

<p>4 衣隊の匪賊なのか、わからない。(二)</p>	<p>んたいしている便衣隊だった。便衣隊は、ふだんは、ふつうのかっこうをして、ふつうにくらしているが、夜になるとあつまって、黒い風のように、日本人の村や、町をおそうことがあったのだ。(二)</p>	<p>をして普通に暮らしているが、夜になると集まって、黒い風のように日本人の村や町を襲うといわれていた。(二)</p>
<p>5 おかあさんは、やけた高田さん達の家の手つだいでか けた。いつも朝早くくる満人の使用人達は、どうしてか 昼ちかくなっても現れない。(三)</p>	<p>おかあさんは、やけた高田さんたちの家の手つだいでか けた。いつも朝はやくくる満人の使用人たちは、どう してか昼ちかくなってもあらわれない。(三)</p>	<p>お母さんは、焼けた高田さんたちの家の手伝いに出かけ た。いつも来る中国の人たちは、どうしたのか一人も現 れない。(三)</p>
<p>6 丘の上は明るくて、しずかだった。 たくさんの満人が働いているはずの校舎には、人かげ ひとつ、ない。(三)</p>	<p>丘の上は明るくて、しずかだった。 たくさんの満人がはたらいっているはずの校舎には、人 かげひとつない。(三)</p>	<p>丘の上は明るくて、静かだった。 できかけの校舎にもなぜか人影一つない。(三)</p>
<p>7 それは、ふしぎなけしきだった。 部落の人達が、うすよごれてかたまっている。そのま わりを、日本の兵隊達が、びっしりととり囲んでいる。 (四)</p>	<p>それは、ふしぎなけしきだった。 部落の人たちが、うすよごれてかたまっている。その まわりを、日本の兵隊たちが、びっしりととりかこんで いる。(四)</p>	<p>それは、ふしぎな光景だった。 中国人たちが集まっている。その周りを、日本の兵隊 がびっしりと取り囲んでいる。(四)</p>
<p>8 「ミオミ村の日本人は、みな殺しにされたのだぞ！ わからんのか!!」(四)</p>	<p>「ミオミ村の日本人は、みなごろしにされたのだぞ！ わからんのか!!」(四)</p>	<p>「ミオミ村はやられたんだぞ。わからんのか」(四)</p>
<p>9 足の小さなおばあさんが、声をあげてころんだ。それ につまずいて、四、五人がかさなつてころんだ。(四)</p>	<p>足の小さなおばあさんが、声を上げてころんだ。それ につまずいて、四、五人がかさなつてころんだ。(四)</p>	<p>腰の曲がったおばあさんが、声をあげて転んだ。それ につまずいて、四、五人が重なつて転んだ。(四)</p>
<p>10 「やつらのまわりから、便衣隊ののこしていった石油 をまけ。逃げるものは、撃て。」(四)</p>	<p>「やつらのまわりから、便衣隊ののこしていった石油 をまけ。にげるものは、うて。」(四)</p>	<p>「やつらの周りから石油をまけ。逃げる者は撃て。」(四)</p>
<p>11 部落の人達は、おいつめられたけものようにかたま りあいながら、兵隊達の動作を、しんと見つめていた。 (四)</p>	<p>部落の人たちは、追いつめられたけものようにかた まりあいながら、兵隊たちの動作をしんと見つめてい た。(四)</p>	<p>くぼ地の中の人たちはかたまり合うようになって、兵 隊たちの動作をしんと見つめていた。(四)</p>